

2022年度第2回 医療法人社団主体会倫理委員会 会議記録の概要

開催日時	2022 年 6 月 7 日 ～ 2023 年 3 月 31 日
開催場所	書類審議
出席委員	市原、森、北村、原、種瀬、伊藤、大塚、清水、坂（敬略称、順不同）
研究計画変更の審議	
申請者	加藤 康太
研究名	当院回復期リハビリテーション病棟における転倒・転落アセスメントスコアシートと転倒・転落発生状況に関する実態調査
研究内容要旨	当院回復期リハビリテーション病棟において、転倒・転落アセスメントスコアシートを用いた転倒リスク評価を実施している。今回、転倒・転落アセスメントスコアシートと実際の転倒・転落発生状況に関する実態調査を実施する。
審議結果	承認 2021-3-2
意見	「当院回復期リハビリテーション病棟における転倒・転落アセスメントスコアシートと転倒・転落発生状況に関する実態調査」（承認番号:2021-3）の研究計画書の軽微な変更の申請であり、迅速審査を行い、特に問題の無いことを確認し承認とした。
研究計画変更の審議	
申請者	谷口 良輔
研究名	当院訪問リハビリテーション利用者における転倒者の特徴
研究内容要旨	訪問リハビリテーションは自力では在宅生活の継続が困難な対象に対して提供されており、その在宅生活継続をしばしば困難にする転機の一つに転倒がある。転倒には身体機能に加えて認知機能、環境要因など様々な因子が影響していると報告されている。その一方で、訪問リハビリ利用者を対象とした報告や歩行が自立していない人を対象とした報告は少ない。在宅では歩行が自立していない人も多く、その場合でも転倒が生じる頻度は一定以上あり、転倒が転機となり在宅生活に支障をきたす例も多い。歩行が自立していない対象も含めた訪問リハビリ利用者全体において転倒者の特徴を探る。
審議結果	継続審査 2022-3-2
意見	前回いくつかの修正箇所が指摘されましたので、継続審査としましたが、修正されていない箇所が認められましたので、今回も継続審査としました。
審議結果	承認 2022-3-3
意見	前回修正されていない箇所が認められましたので継続審査としましたが、今回は修正されており、承認としました。
研究計画変更の審議	
申請者	粉川 征子
研究名	胸腰椎圧迫骨折患者における退院時歩行補助具の有無に影響を与える因子の検討
研究内容要旨	臨床現場において、圧迫骨折受傷後に疼痛やバランス能力の低下、歩行能力の低下によりADL能力が低下する患者を経験する。受傷後は、複数回受傷するリスクや、転倒リスクが増大する為、歩行能力を維持することが重要であると考えられる。受傷前は独歩可能であった患者が、受傷後は歩行補助具を必要とする場合もある。そこで、圧迫骨折患者の入院中の身体機能をカルテより後方視的に収集し、退院時の歩行補助具の有無に影響を与える因子を分析することで、今後のリハビリテーション介入の一助として活用する事を目的とする。
審議結果	承認 2022-5-2

意見	再提出された研究等実施申請書・計画書等を審査し、修正箇所がすべて修正されていたので、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	相和 大揮
研究名	脊椎圧迫骨折患者の予後に影響を与える因子の検討
研究内容 要旨	脊椎圧迫骨折は骨粗鬆症のもっとも一般的な症状であり、Quality of life (以下QOL)、Activities of Daily Living (以下ADL) に関しては、体幹伸展筋力や腰椎可動性が関連していると報告されている。しかし、回復期リハビリテーション病棟入院中の患者では、骨傷部の保護、疼痛のためにそれらの評価を行えない患者も多く、予後の把握が遅れる可能性がある。そこで今回、入院時及び初期に可能な身体負担の少ない評価指標の中で、退院時歩行能力に関連する因子を明らかにし、退院時の歩行能力を予測することを目的とした。
審議結果	承認 2022-8
意見	前向きの研究であり、軽微な侵襲を伴う研究であるため、事前審議にて、委員会を開催して審議する予定でしたが、コロナ感染の拡大により開催ができなくなりました。再度書類審査を行い、全員の承認を得ましたので承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	山本 綾乃
研究名	脳血管障害患者の嚥下機能改善に影響を与える因子の検討
研究内容 要旨	脳血管障害に起因する嚥下障害は、様々な二次的障害を引き起こし、回復過程を阻害する因子と言われている。経管栄養患者にとって嚥下機能の改善はその後の生活に影響するため、予後予測に基づいて適切なリハビリテーションを行うことが重要と考えられる。しかし、嚥下障害の予後に関連した報告は急性期のものが多く、回復期リハビリテーション病棟での報告は少ない。そこで今回、当院回復期リハビリテーション病棟に入院した脳血管障害患者のうち、入院時に胃瘻から栄養摂取していた者を対象とし、改善群・非改善群の比較を行い、嚥下機能改善に影響を与える因子について検討を行った。
審議結果	承認 2022-9
意見	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査」であり、「既存試料を用いて集計 統計処理等を行うもの」と考えられたので、書類審査を行い、その結果「承認」とした。
新規研究計画の審議	
申請者	相和 大揮
研究名	脊椎椎体骨折患者の退院時歩行能力を予測する因子の予備的検討
研究内容 要旨	骨粗鬆症性骨折の中でも脊椎椎体骨折は最も多く、受傷後の歩行能力の低下は、脊椎椎体骨折の予後に影響を与える因子とされている。効率の良い退院支援や在宅生活への移行促進には、入院早期より退院時歩行能力を予測できることが望ましい。しかしながら、入院初期には骨傷部保護のため十分な評価ができず、予測が困難な場合が多い。本研究の目的は、脊椎椎体骨折患者に対する回復期リハビリテーション病棟入院時の身体機能や認知機能などの評価結果から、退院時歩行能力を予測する指標を検討することである。
審議結果	承認 2022-10
意見	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査」であり、「既存試料を用いて集計・統計処理等を行うもの」と考えられたので、書類審査を行い、その結果「承認」とした。

新規研究計画の審議	
申請者	浜内 孝一
研究名	脊椎圧迫骨折後の認知症患者と非認知症患者における痛み感覚の比較
研究内容 要旨	認知症は世界的に注目されている疾患であり、その患者数は年々増加している。また、認知症患者では慢性疼痛有訴率が高いと報告されており、認知症の痛みへの対応が課題となっている。しかし、認知症患者は痛みの評価が難しく、対応が遅れているのも事実である。一方、臨床において認知症患者では非認知症者と比較して疼痛部位や強度が一定しないことをしばしば経験するが、これらの関係を体系的に調べた報告はみうけられない。そこで、本研究は脊椎圧迫骨折後の痛みの強度と部位の変化を認知症と非認知症患者で比較し、認知症患者の痛みの特徴を明らかにすることを目的とする。
審議結果	継続審査 2022-11
意見	「軽微な侵襲を伴う研究であって介入を行わないものに関する審査」と考えられたので書類審査を行った。研究等実施計画書においていくつかの不備が認められたため、「継続審査」とした。
審議結果	承認 2022-11-2
意見	前回、研究等実施計画書においていくつかの不備が認められたため、「継続審査」としたが、委員により指摘された箇所は修正されており、問題が無いと考えられたため、「承認」とした。
新規研究計画の審議	
申請者	鶴 永
研究名	骨粗鬆症性脊椎圧迫骨折における受傷後早期の画像所見と急性期から回復期にかけての歩行獲得との関連について
研究内容 要旨	脊椎圧迫骨折患者の初診時のX線動体撮影、MRI所見と歩行獲得までの日数を調査し、関連性について検討する。
審議結果	承認 2022-12
意見	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審議」であり「既存試料を用いて集計 統計処理等を行うもの」と考えられたので、書類審議を行い、その結果承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	山中 元樹
研究名	脳血管疾患患者における退院先を決定づける要因の検討 日常生活機能動作の能力および退院後の介護力に着目して
研究内容 要旨	臨床現場において自宅で生活していた患者が脳血管疾患の発症を機に、施設への退院を余儀なくされることがしばしばある。自宅退院は多くの患者が望むものであり、また回復期リハビリテーション病棟においても自宅復帰率が施設基準に含まれるなど、自宅退院は患者にとっても病院にとっても必要命題となっている。本研究は、自宅または施設に退院する患者の違いを検討し、入院中のリハビリ介入および退院支援の一助とするための研究である。
審議結果	継続審査 2022-13
意見	侵襲及び介入を伴わない研究であり、かつ既存試料を用いて集計・統計処理等を行う研究と考えられたので、書類審議を行いました。いくつかの細かな修正箇所が指摘されましたので、継続審査としました。

審議結果	承認 2022-13-2
意見	再提出された研究等実施申請書・計画書等を審査し、修正箇所がすべて修正されていたので、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	瀬古 征志
研究名	当院外来血液透析患者における予後予測因子の検討
研究内容 要旨	本研究の目的は、当院外来透析患者の定期検査(種々の画像検査、動脈硬化検査、血液生化学データ、透析関連データ、体力評価データ)の結果を後方視的に分析し、予後に影響する因子を検討することです。入院・死亡をアウトカムとし、関連を認めた因子に着目して早期から介入することで、生命予後改善につながる可能性があると考えます。
審議結果	継続審査 2022-14
意見	侵襲及び介入を伴わない研究であり、かつ既存試料を用いて集計・統計処理等を行う研究と考えられたので、書類審議を行いました。いくつかの細かな修正箇所が指摘されましたので、継続審査としました。
審議結果	承認 2022-14-2
意見	再提出された研究等実施申請書・計画書等を審査し、修正箇所がすべて修正されていたので、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	杉本 樹重
研究名	当院回復期における脳卒中患者が独居退院に影響する因子について
研究内容 要旨	現在、単独世帯又は独居で暮らす高齢者は増加中にある。当院回復期リハ病棟においても、入院前生活が独居であった例も多くあり、脳卒中患者の自宅退院の可否は年齢、性別、身体機能、認知高次脳機能、ならびに日常生活活動に加えて、同居する家族もしくは介護者の人数が大きく関与することが示されている。今後、独居生活している脳卒中患者数も増加することが予想されるが、発症前に独居生活していた脳卒中患者の転帰先を決定づける因子については十分な検討がなされていない。そこで今回当院回復期リハ病棟を退院した患者を対象に独居による自宅退院が可能となる因子について、身体機能やADL動作のFIM得点(運動項目、認知項目)に加え社会的因子(介護保険サービスの利用有無、別居支援者の有無)がどのような関連性をもたらすか調査することを目的とした。
審議結果	不承認(差し戻し) 2022-15
意見	侵襲及び介入を伴わない研究であり、かつ既存試料を用いて集計・統計処理等を行う研究と考えられたので、書類審議を行いました。多くの修正箇所が指摘されたので、不承認(差し戻し)としました。
審議結果	承認 2022-15-2
意見	再提出された研究等実施申請書・計画書等を審査し、修正箇所がすべて修正されていたので、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	渡邊 里咲
研究名	移乗動作に介助を要する脳卒中患者の転帰先に関する要因

研究内容 要旨	脳血管障害 (cerebrovascular accident:以下CVA) 患者の転帰先に影響する因子を調査した先行研究では、主に日常生活動作 (Activities of daily living:以下、ADL)能力が取り上げられることが多い。ADL能力はしばしば Functional independence measure(以下FIM)によって評価され、特に運動項目得点が自宅復帰に重要な影響を与えることが明らかとなっている。しかし、実際の臨床場面では要介助者でも自宅復帰が可能であった患者もいる。これは、ADLの向上が必ずしも在宅復帰に繋がるものではなく、家族背景、社会的背景、病態など様々な因子が転帰先の決定に影響を及ぼしていると考えられ、自宅への退院を推進するために、どのような要因が自宅復帰に影響するかを検討する必要がある。
審議結果	継続審査 2022-16
意見	侵襲及び介入を伴わない研究であり、かつ既存試料を用いて集計・統計処理等を行う研究と考えられたので、書類審議を行いました。いくつかの細かな修正箇所が指摘されましたので、継続審査としました。
審議結果	承認 2022-16-2
意見	再提出された研究等実施申請書・計画書等を審査し、修正箇所がすべて修正されていたので、承認としました。